

名詞の形式化・文法化と複文構成

—ダケ・キリにみる—

宮地朝子（名古屋大学）

miyachia@lit.nagoya-u.ac.jp

概要

現代日本語の副助詞ダケ・キリは、原因理由の（タ）ダケニ/ダケアッテ、程度の（タ）ダケ、限界のタキリ（…ナイ）等、接続助詞ともされる複文構成の用法を持つ。ダケ・キリとも歴史的には名詞から形式化し、近代にはとりたて形式としての構文の特徴を示すが、接続助詞用法はその過渡的段階として近世から観察できる。このようなダケ・キリの史的展開を、複文構成という観点から見直し、名詞の形式化・文法化との相互関係を考える。

1. はじめに 副助詞と接続助詞

現代日本語のダケ・キリについては、限定の副助詞・とりたて形式として研究蓄積が大きい、「接続助詞的」とされる用法がある。ともに節を取り、複文を構成している。

- 1) よく勉強した{だけあって/だけに}試験もなかなかよくできていた。〈原因・理由〉
- 2) 彼は家を飛び出して行ったきり帰ってこない。〈期限〉

限定用法に注目が集まっているダケ・キリの場合、時間関係や因果関係を表す用法は、接続助詞的な「慣用用法」として考察の対象外とされることが多い。問題関心の異なりから連続的に把握されることはまだ少ない（cf.ダケ：安部 1999、キリ：渡邊 2002）。

しかし、名詞出自の副助詞、接続助詞の構成する句・節はともに連用修飾成分であって、名詞の機能語化として連続的に捉えられうる（寺村 1978）。また、歴史的には、程度用法や原因・理由解釈の可能な用例が限定用法に先行し、原因・理由、程度、限定で解釈があいまいな例も少なくない。本発表では、ダケ・キリの歴史的展開を名詞の形式化・文法化とする観点からの概観を踏まえ、複文構成と限定・とりたて用法の相互関係を考える。

ダケ・キリの歴史的展開には以下のような共通点がある。これに注目して見ていく。

- ・ともに形式化の早い段階で、まず叙述名詞句構成（述語用法）の段階を経る。
- ・副詞句化は、数量・値名詞句構成の用法（アリタケ、アリキリ（期間・回数表現＋キリ）等）において果される。
- ・複文構成に関わる連体節の拡張としてのタ形への接続は江戸語で生じている。
- ・とりたて（事態レベルの限定）用法、統語上の「助詞化」は近代以降認められる。

→ 叙述名詞句構成（＝名詞としての形式化・範疇化）から連用修飾用法獲得へ
副詞句構成から機能語（助詞・接辞）としての再分析へ

→ 「複文構成」から「とりたて」用法獲得へ

3. ダケの歴史

3.1. 古代中央～上方語

- : 名詞「丈」由来
- : 限定用法の成立 近世ごく末期
- : 共通語への定着は明治 30 年頃
- : 〈数量〉〈程度〉〈原因理由〉その他の慣用用法が〈限定〉用法成立以前に存在した
- : 〈限定〉用法は〈程度〉用法から派生した
- : 方言において歴史的諸用法が観察される

(→ 宮地 2010: 名詞の形式化・文法化という観点から再考)

3.1.1 形式化、叙述名詞化（～中世末まで）

・形式化

- 14) [幼少の俊蔭は] 年にもあはず、丈たかく心かしこし。(宇津保物語・一)
「丈」＝人間にまつわる「高さ」「長さ」を表す名詞
- 15) 先達ノ心中ノタケ、今ノ學人モ可思、莫忘。(正法眼藏隨聞記)
- 16) 御髪は、み丈にていとけ高う清らなり。(宇津保物語・三)
- 17) 十四五ばかりなるめのわらはの、……、かみはあこめだけなるが、はんざうたらいにくしいれて、もてまひりたり。(平家物語・下)
※上接要素：人間・身近な動植物器物の「丈」にまつわる動詞／名詞
- 18) 身ノタケ八丈ナリ。(神皇正統記)

・叙述名詞化

- 19) a 御贈物に (中略)、衣の丈なる櫃どもをえもいはずし飾らせ給て (栄花物語・下)
b 割菱縫いたる水干に、丈なる髪高らかに結ひなして (義経記)

・上接要素の拡大 (抽象化・範疇化の促進)

- 20) 緋繻子鍮印長。(中略) 物の自由に賣渡しぬ。(1688:日本永代藏)
- 21) 捨し子は柴荊長にのびつらん (野水) (1684:連句篇/冬の日)
- 22) 汝干になれば洲崎の砂の腰だけ。(1719:平家女護嶋)
- 23) a 加様に男の方から首たけにはまつて居る成ば (1724-26:ひとりね)
b 過し夜、さる大夫にあひて、帯をとくに、「もはやときんせん、正気散」と言しがた、かわゆらしさ、首たけ／＼。(1724-26:ひとりね)

・程度用法、慣用用法の出現

- 24) a さりながらそれを馴染だけに御恕しあれかし。(1694:好色萬金丹)
b 小いからの馴染だけ我が子のやうに思はれて。(1704:重井筒)
c 小助は傍輩だけで手ぬるい。(1780:松新版歌祭文)
d なるほど、作者はさくしやだけじゃ。(1823:小倉百首類題話)
e 「さすがは田舎だけ、ものがふ自由だ」(江戸語：1802-22:東海道中膝栗毛)
- 25) a 「深き契りは中／＼今も忘れ難し。てんぼ物するだけの徳なり」(1698:新色五卷書)

- b こらへるたけと包めども咽びふくろび泣きみたり。(1708年:けいせい反魂香)
- 26) a 伊勢路へ向けて遁るゝだけは遁れて見ん。(1718年:博多小女郎波枕)
- b 「成程、モウ待だけ待たら義理もあるまい。」(1789年:韓人漢文手管始)
- 27) a 御苦勞なだけ腹立もきつゐ。(1777年:伽羅先代萩)
- b モどふ言ても若いだけ。(1777:伽羅先代萩)

・連用句(副詞句)構成の契機

- 28) a 遠い田舎から指ざしして笑ふ男、金子三千兩ありたけ遣ふて遊ぶはづに極め(1694:浮世草子集(好色萬金丹))
- b ありたけの道具を渡。(1698:新色五卷書)
- c ……年寄こまり入、分別の有たけを取出し、(1774:軽口五色かみ)
- 29) a 葭原雀の鳴くやうに息の有りたけしゃべって。(1708:丹波與作待夜の小室節)
- b ぶそうじなきせるとミへて、ありたけ頬をすぼめられても通らバこそ。(1774年:軽口五色かみ)
- 28) b' ありたけの道具を 渡。
= 道具をありたけ 渡。
= ありたけの道具を 渡。
→ Nありたけ/ありたけのN/Nのありたけ:項名詞句の量=述語の事態量
- 29) a' 葭原雀の鳴くやうに息の有りたけφしゃべって。
≠ ありたけの息を・で
≠ 息ありたけを・で

→ 項名詞句と独立の述語の事態量

※名詞のまま副詞句も構成可能な名詞 → 数量詞句・値(量)名詞句

- 30) a 3匹の子豚がすんでいました。
b 子豚3匹がすんでいました。
c 子豚が3匹φすんでいました。

※項名詞に独立して事態の〈程度〉〈数量〉〈頻度〉などの副詞的概念を体現する名詞

→ 遊離数量詞句

- 31) a 本 100 ページを読んだ。(≠ 100 ページの本を読んだ。)
- b 本を 100 ページφ読んだ。(≠ 100 ページの本を読んだ。)

・〈限定?解釈〉

- 32) 鳥でも魚でもころせば、其寿命が此方の足しになる道理にて、鶴なら八千年だけ、こつちへますといふものじやないかといへバ(1776:年忘嘶角力)
- 33) あるやもめぐらしの雅人(中略)くわす貧楽、高枕に夜鳴のうどんの声ひゞき、枕もとさぐりまわせハ、二八だけのはした錢ハ有。(1800年:新製欣々雅話)

・〈限定〉解釈の確立(近世ごく末期~近代)

- 34) さよ々々そうおつしやつたらよろしり升たつた二丁だけの廻りでムリ升。よつて大事ムリ升めせんてエナ(穴さがし心の内そと・初編)

- 35) a 「其ん丈けお前が親父に答て呉れたらゑいのや」(滑稽曾呂利叢話「吹替息子」)
 b 「お伊勢七度熊野へ三度愛宕さんへは月参りと、これだけ参ったら難が逃れる。」
 (二十世紀初頭大阪口語の実態『いらちの愛宕参り』)
- 36) a 婿さんが料理を食はうと思つて視る、と庖丁が無くて肉又の熊手だけは有るが、
 何う為て食ふんだらう怪しげなハテナ…(滑稽曾呂利叢話「自由の妹と背」)
 b 「ちょっとやで、よけ注ぎなや少しだけ。…」(「十三夜」『猫の災難』)

・他助詞への後接例(副助詞・とりたて化)

- 37) 「えーまい、食わ、食わせへんさかい、けども、食うとだけ言うてもらえんか。」
 (二代目桂春団治「十三夜」『青菜』)

限定用法の増加、「とりたて」化については、近代以降の新しい現象である。また、原因・理由用法の、「だけに／だけあって」類型への偏りは見られない。これらは、江戸語～東京語で整備された語法である可能性がある。

3.2. 江戸語～東京語のダケ

江戸語では、上方語で見られなかったタ形への接続例(38)があり、一方、「V1 ダケ V1」類型が見られない。タ形への接続は、ダケの連体節の拡張(テンスの分化)であり、複文構成参与への重要な一段階である。江戸語でこれが果たされたことは注目に値する。このような江戸語ダケの様相は、江戸語キリに類推した現象である可能性がある(4.2節)。他助詞に後接する助詞化(39)の様相が近代に入ってから見られる点では大阪語と同様である。

・タ形への接続(19世紀江戸語～上方語：0、明治期大阪語：1、20世紀大阪語：8)

- 38) a 「南無三、しまった。早く起きて働いただけ、うまらねへ」(1802:臍くり金)
 b 久太「それでもお前、食傷した時は、胸に有る物を吐いてしまふがいひといふから、
 胸に覚えへただけの事は、吐いてしまいやす。」(1813:お染久松色讀販)

・他助詞への後接例(助詞化・とりたて化)

- 39) 雨が坐敷にだけ漏らない(1906:『日本口語文典』鈴木暢幸)

原因・理由用法特有の「だけあって」形式については、管見では江戸語の(40)aが初出であるが現代に至るまで頻度が非常に少ない。また近世期の原因・理由用法は、「N だけ・だけで・だけに」などの形で一定しておらず(例えば24))、現代語で見られる「だけに」への偏りは19世紀末以降のようである。なぜこの時期かを説明するには、副詞句構成用法の獲得、江戸語での連体節の拡大、限定用法の確立といった段階を経た上での差別化とみるのが合理的ではないか。

・ダケアッテ・ダケニ類型の整備

- 40) a おめさんはしゃうれうながやのたながしら、ゐはいだうのいたがしらだけあって五歩も透間はごぜへません(1817 大千世界楽屋探[江戸語])

- b 喜撰だけあつてめつさうよいわいな (略) さすが喜撰茶屋といふだけあつて、こつたものぢや (1823 小倉百首類題話[上方])
- 41) a [お政は]旧弊な娘、お勢は大嫌い、母親が**最負にするだけに**、尚ほ一層此娘を嫌ふ (1887-89:浮雲・三)
- b 身を約めて財産をお作んなすつただけに分限を知って質素な家風を残して置いて下すつたから (1902:社会百面相・七)
- c 其本性はおろかならねど、自惚の原素が多いだけにたやすく娼妓の餌食ともなり自然為にもなる客人ゆゑ、娼妓もまんざらでないのと見えて (1885-86:当世書生氣質)
- d 農夫といふものは、蚯蚓のやうに土地にこびりついてゐるだけに、得て在所自慢をしたがるもので (1915-30:茶話)

→ 名詞の変化として歴史をみると…

- 42) ① (名詞一般に生じる) 形式化 > 叙述名詞化 (程度) < 原因・理由>
- ② 「アリタケ」のイデオム
- ②-1 分量・尺度一般を表す「値名詞」句構成 (数量) < 程度>
- ②-2 名詞でありかつ副詞句を構成する「遊離数量詞」句構成
- ②-3 句の包摂
- ③ 江戸語での上接要素の拡大(テンスの分化した節構成) ←江戸語でのキリへの類推
- ④ <限定> 解釈成立、増加
- ⑤ <限定> 統語的に助詞化 / <原因・理由> 「だけに/だけあつて」類型への偏り

4. キリの歴史的变化

キリも、連体修飾節を必要とせず際限・期限を表す自立語用法から、中世末以降、限定用法に、19世紀江戸語以降、接続助詞的用法に参与する。(渡邊 2002、宮地(印刷中)参照。)

- 43) ① 時空間において「(区) 切り=限界・際限」を示す範囲名詞
- ② 時間名詞・空間名詞・身体名詞など一定の上接語に付く形式名詞(形式化・接尾語化)
- ③ 述語用法獲得、叙述名詞句の構成(叙述名詞化)
- ④ アリキリ・指示詞+キリ等での副詞句構成
- ④-1 語彙化 / ④-2 遊離数量詞的副詞句用法
- ⑤ 上接要素の拡大(ル・タ形) = 副詞節を構成する形式名詞(副助詞)化
- ⑥ 否定述語文での再分析(係助詞化)

中世末までに①～③が見られ、近世上方語においては②③が隆盛である。④の萌芽の様相まで見られるが、文法的性質の大きな変化④⑤は主に江戸語において展開する。⑥は明治大正期の東京を含む東日本で方言的事象として生じた。44)のように、ダケは上方語、キリは江戸語とされるが、両者とも、上方・江戸でそれぞれの用法を持つ名詞として形式化・文法化を果たしている。ただし、現代語の様相は、江戸語での展開が大きく影響している。

- 44) たけ、これだけ、それだけなどいふ。これぎり、夫ぎりなり (1819頃:『浪花聞書』)

4.1. ～近世上方語まで

基本的に叙述名詞句構成の形式名詞と位置づけられる。上接語は時間名詞、場所名詞、数量名詞、および指示詞、動詞連用形から句・節へ拡張するが、上接語 x を期限・際限・上限とする属性・状態を述べる叙述名詞句構成の形式名詞といえる。(湯澤1936:550-551) 否定述語にかかる用例 51)でも必ず～キリデの形で出現し、否定述語との拘束関係までは認められない。

・自立用法

45) チャウドキリヲシテ、其中ニ専一ニ寸陰分陰ヲ惜テ修行スルゾ (勅規桃源抄)

46) a 来廿日をきりに無沙汰候はば、(二条宴乗記抜書)

b 御身いとしにはきりがない (宗安小歌)

・形式化 (叙述名詞用法)

47) a 柿のかたびらのよごれたるに、墨染ごろものひざきりなるに、(高野物語)

b 沖をきつと見てあれば、あふぎてたてたる其間七八段ぎりと見ゆる(幸若・那須与一)

48) コレワガヒトリゴナレバ、ミガタノミキリデ tanomiqiride ゴザル(1603-04 日葡辞書)

49) a 客しげき内へ、三十日切 (ぎり)にやとはれて (1686 好色一代女 5・162)

b かの人の云「惣じて色は廓きりのものなり。(1724-26 ひとりね)

50) a ゆうれい、とんとちからをおとし、あゝ、もはやおれが命もこれぎりじや((1768 軽口はるの山)

b おはらだちは御尤しやが。それぎりにしなさるといふと。なにやらみじゆく
なやうじやござりませんか。(1826 色深狭睡夢)

51) a 今日の吉田屋の殿達の首尾が悪しうて、節供の事はおいて今日切りで逢はしやれぬとて、
主さまに代へはせぬ。(1711 傾城禁短氣)

b もしへあなたもふ是切(これぎり)でよんどおくれなきらんじやあるふナ(1820 粋の曙)

52) a 扱はる／＼”より樽二つ此酒の有切 (ありぎり) にあそぶなれば、(1686 好色一代女)

b また一艘のふねにハ、仙台の殿さまが高尾をバさげぎりにしている(1841_46 落断千里戴)
→「句の包摂」

53) a 巾着に有るきり明けて御初穂と申して投ぐれば (好色二代男・三)

b 楊弓やで大工がきをもんであるきりじや (1839一口ばなし)

(53b)→文末名詞文 (新屋1989) 体言締め文 (角田1996)

・〈限定〉 解釈可能なキリ

54) 去年の冬私が宿でお雪様とお前と逢はせた時。是限 (かぎ) りとおっしゃれたか。サア
なんと。たった一夜切 (ぎり)に切賣にする娘御ちゃござらぬ。(1717 鐘の権三重帷子)

55) a 凡ソ下ニ立ツモノハ、己ガ職分ヲ守リ、識ヲヨク覚エテ、上ヨリノ御尋アラントキモ、
己職ギリノ事ヲ申上ルガヨシ。上ヨリモ職分ギリノ事ヲ御尋アルガヨシ (1724-35 槐記)

b 「女房と菅笠とは一年切 (ぎり)の物也」といひしはむごし。(1724-26 ひとりね)

c 品川であれ切 (ぎり)かのとたわけもの (1765-1791 川柳集 (誹風柳多留)

56) 瀬多の久三が筒の時百切 (ぎり)張って見たれば。勝つ程に／＼一息に七百。

(1708 丹波與作待夜の小屋節)

※上方語での副詞句構成? 唯一例

- c 草鞋を買に行った切りだが、どこぞで片足上げちゃアいねへか。(1859小袖曾我薊色縫)
- d 幼稚のうち参つたきりだから (1857-63七偏人) [品]

4.2.3 近代東京語

近代東京語の様相は、ほぼ19世紀江戸語の様相を引き継ぐが、指示詞+キリや～タキリ類型の割合の増大が進む。この内、「{指示詞／～タ} キリ φ…否定」型がやや多いが、全体にキリダ、キリ {デ・φ} 肯定・否定の用例が偏りなく見られ、否定述語との拘束関係は依然として成立していない。これが現代共通語のキリの様相そのものといえる。(活用語への下接例では、66)のように連用形・ル形・タ形が揃い、やや現代語と異なる。68)は方言的事象。)

- 64) 「君、これは返さなくても好いが、僕はこれ切り出さないよ」と云ったことがあった。
そして其友達とはそれ切 (きり) 絶交の姿になった。(青年)
- 65) a …と云ったら寒月君は「なるほど」と云ったきり又謹聴の態度に復した。(1905吾輩は猫である)
- b 赤シャツは知らん顔をして出て行つたぎり、顔を出さなかった。(1906坊っちゃん)
- c 昼も夜も閉じこもつたきりで、滅多に日の目も見たことはありません。(1918地獄変)
- 66) a 角屋の丸ぼやの瓦斯燈の下を睨めきりである (1906坊っちゃん)
- b 遣って試るです、といふきりで、取付島も何もない (1896化銀杏)
- c 其処の主人が肺病で寝た切りだったので (1916死者生者)

・キリシカ

- 67) a 僕は家にある刀剣はみんな売ってしまつて、今差している大小二本きりしかない。(福翁自伝・228)
- b 「何んか有るまいか…」と探すと片隅に押附けて有つた塵埃だらけの筒袖を引張つてみましたが、身大の短矮な奴が着た物と見えて腰ツ限 (き) りしか御座いません。(明治大正落語集成「お祭佐七」)

・シカの限定=(係)助詞化 (宮地2007)

- 68) a 貴方のような清浄な人—妙な形容ですが私のような人間からはそうきりいえません。
(濁った頭)
- b 候文の手紙を書く機会の殆どない私には、仮令言文一致を使つても候文的な内容きり書けそうもない叔父や叔母への手紙は容易に書けなかった。(大津順吉721)
- c なんでもいいさ。ぶつかればわかるだろう。皆その人の持っている価値だけきり發揮できないのだからね。(1919友情) (岩崎1972)
- d 僕もまだ16にきりならない妹はもう結婚のことをそろそろ心配しなければならないと思うといやになるよ。(1919友情) (岩崎1972)

5. おわりに

「接続助詞的」用法を持つ限定の「副助詞」ダケ・キリの諸用法と歴史的展開は (事態レベルのとりたてとして助詞化した段階をのぞき)、名詞の形式化・文法化として、名詞句

の多様性のなかで連続的に把握できる。

叙述名詞句構成から、複文構成や限定・とりたての「助詞」という分析に至るには、定型「だけに／だけあって」への整備や、後ろに助詞を要しない連用修飾節構成(ダケφ、キリφ)用法の獲得が必須である。これらには副助詞用法に直結する数量・程度の副詞句構成の段階と、江戸語でのタ形接続(連体節の拡大)、限定用法との差別化が大きく関与しており相互関係が認められる。

ただし、タ形接続がなぜ江戸語で生じたか(江戸語の構造的性質か、キリ・ダケの語彙項目としての個性か、また形式化の度合いが関与するか否か)など、未解明の課題も多い。カギリ(ナイ限り／ル限り／タ限り)、バカリ(タばかり／ナイばかり(に))、トコロ(ところで／ところが／ルところだ／タところだ／ルところだった)など、名詞出自で複文構成にかかわる要素の歴史的展開と合わせ、今後の検討課題としたい。

■引用参考文献

- 安部朋世 1999 「ダケの位置と限定のあり方—名詞ダケ文とダケダ文」『日本語科学』6.
- 角田太作 1996 「体言締め文」『日本語文法の諸問題』ひつじ書房
- 新屋映子 1989 「"文末名詞"について」『国語学』159, 日本語学会
- 寺村秀夫 1978 「連体修飾のシンタクスと意味—その4—」『日本語・日本文化』7号、大阪外国語大学留学生別科
(寺村秀夫 1992 『寺村秀夫論文集 I』くろしお出版)
- 橋本修 2003 「日本語の複文」『朝倉日本語講座 5 文法 I』.
- 西山佑司 2003 『日本語名詞句の意味論と語用論—指示的名詞句と非指示的名詞句—』ひつじ書房
- 堀江薫、ブラシャント・バルデシ 2008 『言語のタイポロジー』研究社
- 宮地朝子 2007 『日本語助詞シカに関わる構文構造史的研究』ひつじ書房
- 宮地朝子 2010 「ダケの歴史的変化再考—名詞の形式化・文法化の諸条件」田島毓堂編『日本語学最前線』和泉書院.
- 宮地朝子 (印刷中) 「名詞キリの形式化と文法化」青木博史編『日本語文法の歴史と変化(仮)』くろしお出版.
- 湯澤幸吉郎 1936 『徳川時代言語の研究』刀江書院
- 渡邊ゆかり 2002 「付属語「きり」の用法の変遷について—江戸語・東京語を中心に—」『日本語科学』12.
- 松村明編 1969 『古典語現代語助詞助動詞詳説』学燈社
- 柳田征司 1992 「限定の意を表わす副助詞の変遷—方言分布と文献資料とから—」『日本語学』11(6), 明治書院
- 岩崎摂子 1972 「〈きり〉〈ぎり〉考」『女子聖学院短期大学紀要』5.
- 此島正年 1966 『国語助詞の研究—助詞史素描』桜楓社
- 奥津敬一郎 1974 『生成日本文法論』大修館書店
- 【用例出典】原則として日本古典文学大系(岩波書店)による。その他は以下のとおり。『元禄期軽口本集』『安永期小咄本集』『化政期落語本集』岩波文庫／上方板噺本『噺本大系』44 作品／上方板洒落本『洒落本大成』中央公論社(大成の収録巻)13 作品／「穴さがし心の内そと」『近代語研究』第四集／大阪落語速記本:「滑稽會呂利叢話」1893(明治 26)／大阪落語文字化資料『二十世紀初頭大阪口語の実態—落語 SP レコードを資料として—』(平成二年度科研費一般研究(B)研究成果報告書、研究代表者・真田信治、1991 年)／『二代目桂春団治「十三夜」録音文字化資料』(平成十年度科研費基盤研究(C)研究成果報告書、研究代表者・金沢裕之、1998 年)／『口演速記明治大正落語修正』1 巻 講談社／『近代作家別用語索引』教育社
- 【付記】本発表の内容は、科学研究費補助金 22520464(基盤研究(C):研究代表者・宮地朝子)および国立国語研究所共同研究プロジェクト(代表者・青木博史)による研究成果を含む。